

アートに潜むドラマ

私がパブロ・ピカソと出会ったのは、10歳のとき、倉敷の大原美術館でのことである。

絵を描くのが大好きな少女だった私は、岡山に単身赴任中の父に連れられて、大原美術館へ出かけていった。シャヴァンヌやエル・グレコの名画に心を躍らせて見入っていたが、

ふと、奇妙な絵に出くわした。それが、ピカソの「鳥籠」だった。

なんという下手な絵だろう、と子供心に闘争心が湧き、その日から「ピカソよりもうまく絵を描きたい」と、常にピカソを意識してきた。なかなか生意気な子供であった。

「ゲルニカ」を初めて目にしたのは、中学校のとき、美術の教科書で見た。不思議な絵だと思った。同時

になんとか怖いとも。戦争を表している絵だとは、ついぞ思わなかったが、不吉な雰囲気と、モノクロームの色合いが寒々しく感じられた。

しかし、あの奇妙なほど引き延ばされた横長の画面や、なぜあんなふうに画面いっぱいに苦しみもたえる人間や動物が描かれているのだろうと、作品が描かれた背景に興味をもった。

それまでは、おそらくほかの多くの子供たちがそうであるように、風景画や肖像画など、美しい色彩と均衡の整った構図の絵を見るのが好きだった。自分もまた、そんな絵を描きたいと思っていた。けれど、画家が創作した背景に何があったのか、などというふうに考えたことは一度もなかった。絵描きは絵の勉強をして技術を身に着けるからこそ、絵描

きになるのだろう。作品が創られる際の心の動きがどんなふうだったのか、いったいどんなドラマがそのとき画家にあったのだろうか、初めて意識したのが「ゲルニカ」だった。

「ゲルニカ」は、1937年、パリ万博のスペイン館に出展されるために、当時内戦状態にあったスペイン共和国政府からの依頼を受けて制作された。当初は「画家とモデル」のようなごく普通のテーマで描かれる予定だったが、祖国スペインの地方都市ゲルニカが、反乱軍に加担したナチス・ドイツ軍の空爆を受け、一般市民が犠牲になったニュースに憤ったピカソが、^{いっき}一気呵成に仕上げたことで知られる。このとき、ピカソの愛人で写真家のドラ・マールが制作風景をフィルムに収めていたことも、この作品が誕生した背景を後世に残すのに役立った。

この一点を私自身の創作のモチーフにしよう、つまり小説のテーマにしようとしたのは、アートが生まれる過程にはドラマがあると知ったからだ。ピカソは私を画家にはしなかった。その代わりに小説家にしたのだと、ずっと思っている。

著作権の関係で、ウェブサイトでは作品を掲載できません。

第 10 回

「ゲルニカ」

パブロ・ピカソ

キャンヴァス、油彩 349.3×776.6cm 1937年
国立ソフィア王妃美術センター蔵(スペイン)

©2016-Succession Pablo Picasso-SPDA (JAPAN)
Photo: Bridgeman Images/DNPartcom

※「美術2・3」P41-44に掲載

原田マハ
はらだ・まは

小説家。1962年東京都生まれ。
関西学院大学文学部日本文学科および
早稲田大学第二文学部美術史科卒業。
馬里邑美術館、伊藤忠商事を経て、
森ビル森美術館設立準備室在籍時、
ニューヨーク近代美術館に派遣され同館にて勤務。
2006年に小説家デビュー。12年に発表した
『楽園のキャンヴァス』は第25回山本周五郎賞などを
受賞し、ベストセラーに。近著に、「ゲルニカ」をめぐる
アートサスペンス『暗幕のゲルニカ』などがある。